

## 高際澄雄先生に贈ることば

博識な英文学者、有能で情熱に溢れる英語教育者、物事の表裏をわきまえた  
組織運営の推進者、郷土を愛する先生に敬服と感謝を！

佐々木 一 隆

高際澄雄先生は、私が宇都宮大学教養部に赴任した1987年4月からご一緒させていただいていますので、27年もの長い間にわたり同僚であり、先輩であり、先生が入れてくださる紅茶を飲みながら気軽にお話できる友人でもあります。当時の教養部英語科は、石川衛三先生、大關篤英先生、小林隆久先生、土屋唯之先生という年長組と、市川裕見子先生、富山英俊先生、佐々木一隆という着任して間もない若手組の間を取り持つ中堅という存在でした。しかし、すでにリーダーの風格があり、英語科会議や教授会で大局的的確な発言をされていたと記憶しています。先生は東京教育大学で文学修士号を取得され、1975年4月から1980年9月まで新潟大学教育学部助手・講師をお勤めになり、1980年10月に宇都宮大学教養部に異動されましたので、着任して7年足らずで中心的立場となり、周りの教員を牽引していたこととなります。1994年10月に国際学部が創設される際にもそうしたリーダーシップを発揮されました。学部創設以降のことはご存じの方も一定数いると思いますが、研究活動、学部入試の立ち上げをはじめとする教育活動、組織運営、社会貢献と常にその中心として行動して来られました。

先生のご研究については、英語学が専門の私に語る資格も能力もありませんが、少しでも感想を述べさせていただきます。日本英文学会、日本ジョンソン協会、日本18世紀学会などに所属されている先生は、英文学はもとより、英語圏を中心として世界の文化を広くそして深く論じられる一級の学者です。ジョンソン協会では編集委員も務められました。1980年から90年代にはイギリスの小説家スモレットや『スペクテイター』誌に関する論文を紀要や研究会誌、研究社の『英語青年』や大修館書店の『英語教育』に精力的にお書きになっていました。こうしたご研究の背景と原動力には、80年代に若手の文部省在外研究員として1年間ロンドン大学で研究されていたことがあるに違いありません。ミレニアムを迎えた2000年頃からは、文学と音楽との関係にご関心が広がって行ったとお見受けします。先生からは大学院の授業での学生の発言がきっかけだったとお聞きましたが、大

学時代にクラシック音楽鑑賞のサークルに所属されていたことも無縁ではないと思います。2010年10月には大塚英語教育研究会で「18世紀初頭イギリスの詩と音楽」というテーマで講演をされ、パワーポイントと映像を駆使しての分かりやすいお話が好評を博しました。このような長年のご研究に関してさらに驚くことは、英文学領域ではほ切れ目なく科学研究費を獲得されてきたことで、これも一級である証左です。

先生の国際学部と宇都宮大学における教育上のご貢献については、誰の目から見ても明白で、語り尽くせないほど数多く、しかも多岐に渡っていて、影響力が大きいということです。その中で特筆すべきことは、先生には新しいことを生み出す能力、決して楽ではない面もある各授業を持ち前の明るさで楽しむ力、そして行動力があるということではないでしょうか。例えば、三泊四日の合宿形式で行われる「英語会話」(English Intensive Training)は専門外国語の重要科目であり、国際学部設置申請書で文部省に対し目玉の一つとして説明しましたが、その特色ある教育内容と教育方法は先生のアイデアによるものです。もちろん、学生時代に参加された語学教育振興会の Intensive Training Course をモデルとしたり、同僚だった Sherman Lew 先生などの有益なご助言があったりはしましたが、全体を束ねて国際学部独自の授業に仕立てた力は先生を置いて他の人には誰も真似できないものでした。合宿では、責任者として様々な運営を取り仕切りながら、一教員として授業や課外活動も熱心に指導されていました。早朝には端正で流暢な英語をお使いになって、Good morning で始まる Wake-up call のアナウンスを放送されたり、カメラマンとして授業風景や課外活動の様子を撮影されたりしていました。きっとつらい面もあったとは思いますが、いつも楽しそうな(そしてほとんどは実際に楽しんでいらっしゃる)お姿が印象的でした。

こうした教育上のご貢献は、「英語会話」に限らず、「外国語臨地演習(英語)」や大学院の「英語圏文化論」の立ち上げでも遺憾無く発揮されました。この「演習」は初代学部長の西村文夫先生からの依頼を受けて立ち上げたもので、当時は単位化されていませんでした。しかし、当初から事前・事後の指導をされ、初回は学生をカーティン工科大学(オーストラリア)まで引率して行動をとみにされました。その後、第二代学部長の鈴木博先生からのご助言を得て、国際教育交換協議会との連携のもと継続実施が可能となり正式の授業として単位化されたので

す。大学院は1999年に発足しましたが、その際に、英語を母語とする国には何か共通する文化があるはずというご発想で「英語圏文化論」を始めました。その後2006年には、Wierzbickaが*English: Meaning and Culture*という本を出版しましたが、それを読んでみると先生の達観と先見性に敬服します。学部では学生と教員にとって「卒業研究」が最も大切な活動となりますが、そうした卒業論文の指導についても先生のご発案のすばらしさと不断のご努力が見られました。一つには、1999年に国際学部一期生が卒業する年から現在に至るまで（「英語教員」が主査となる場合に限られますが）卒業論文の面接試験を毎年欠かさず実施してきたということです。これも先生のご提案と行動力のおかげです。もう一つは、高際研究室では一期生以来ほぼすべての学生が英語で卒論を書いてきたという事実です。学部や学科が組織的に英語による卒論執筆を義務づけていない現状では、先生の個人的なご努力がなければ実現しなかったことは言うまでもありません。卒業後の学生からも慕われて交流を続けていらっしゃるのも頷けます。

教育のことに限っても書きたいことはまだまだありますが、他のことにも少しだけ触れます。高際先生の偉大さは組織運営の面でも顕著です。全学の組織運営としては、2002年から二期連続で4年間評議員を務められたことが挙げられます。学部での組織運営については、簡単には説明できません。ご定年を迎える最後の年であっても人事調整委員長や多文化公共圏センター長、そして外国文学研究会長を務められている点に触れるに留めます。ただ、こうした大学・学部の表舞台でのご活躍だけでなく、職員組合の中心として宇都宮大学の教職員を見えないところから支えてくださいました。ご在職30年を超える間に、書記長や執行委員長を申し訳ないほど何度も歴任されました。感服あるのみです。社会貢献については、郷土にある渡良瀬遊水池、足尾、日光、益子などを巡って活動し、田中正造や濱田庄司らにも関心を寄せられています。こうした故郷とその偉人たちの信念に裏打ちされた行動が大学人としての先生の共感を呼ぶのではないのでしょうか。基盤教育で担当された「栃木県の歴史と文化」にもそのことが窺えます。

病気には縁がないと思っていた先生ですが、2012年10月の授業中に倒れられ、私たちは大変に驚き心配しました。幸いにもその後順調に回復されましたので、ほっとしています。今後はどうか無理をされないでください。ご健勝とご発展をお祈りいたします。高際先生、長い間本当にありがとうございました。